

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」地域活性化・まちづくりへの応援
メッセージ

会報

『特集』号

2015. 4. 5 発行

編集責任：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

特別企画講演会（講演記録要旨）

『情報時代とまちづくりー100年単位の目標転換ー』

東京大学名誉教授 月尾 嘉男 氏

平成 26 年 4 月 5 日（土）春日井市東部市民センター大ホールにおいて、「ふるさと春日井学」研究フォーラム主催、春日井市、春日井市商工会議所後援の特別企画講演会を行いました。市民 200 名が参加しました。

月尾 嘉男 氏プロフィール

愛知教育大学附属名古屋中学校

愛知県立旭丘高等学校

東京大学工学部建築学科卒業

東京大学大学院工学研究科建築学

専攻博士課程修了(工学博士)

名古屋大学工学部助教授・教授

東京大学工学部教授

東京大学大学院新領域創生科学研究科教授

総務省審議官/顧問

現在 東京大学名誉教授



会場風景

(講演記録要旨)

目次 (講演配布資料レジメ)

- 1 日本がっくり
 1. 高齢人口社会・日本
 2. 財政破綻社会・日本
 3. 対内投資小国・日本
 4. 国際観光小国・日本
 5. 高値安定社会・日本
- 2 日本にっこり
 1. 健康大国・日本
 2. 平等社会・日本
 3. 安定社会・日本
 4. 教育大国・日本
 5. 研究大国・日本
- 3 衰退日本の原因
 1. 過剰適合の悲劇
 2. 工業社会に過剰適合した近代日本
 3. 潮流の180度転換
 - 1) 増大から減少
 - 2) 集中から分散
 - 3) モノから情報
 - 4) 生産から生活
 - 5) 開発から回復
 - 6) 依存から自立
 3. 4 情報社会に適応遅延した現代日本
- 4 百年単位の転換
 1. 画一から多様
 2. 経済から文化
 3. 財力から魅力
 3. 国家から地域
 4. 遠望から脚下
- 5 多様日本の発見
 1. 多様な自然環境
 2. 多様な文化環境
 3. 多様な精神構造
- 6 21世紀の日本の目標
 1. 伝統文化の再興
 2. 縮小文化の認識
 3. 吾唯知足の精神

(講演要旨)

私は名古屋市に生まれ、18歳まで名古屋にいました。大学を卒業してから名古屋大学に16年勤務しましたので、人生の半分をこの地域で過ごしました。都市計画を専門にしていたので、この高蔵寺ニュータウンはなじみのある地域で、今回このような機会をいただき感謝しております。

地域が発展をしてゆくことは素晴らしいことですが、地域が発展は、誰かがやってくれるわけではなく、自分たちで進めない限りできないということを色々な角度からお話させていただきます。

日本の置かれている状況を心配しておられる方は多いと思います。竹島問題とか尖閣諸島の問題とか、最近では韓国がバージニア州議会に働きかけて日本海という名称を韓国名の東海にするということが通ってしまうなど、様々な事件が起こっています。政治的な問題も重要ですが、日本の社会も困った状態になっているということをご紹介します。

最低の日本

一番目の問題は少子化です。人口の何パーセントが 15 歳以下かを調べると、日本は最下位です。その反対に世界で一番高齢者の比率が高いのも日本です。子供が生まれればいいのですが、合計特殊出生率は世界の 190 番目という状況です。1980 年代はアメリカもイギリスもフランスも日本も 1.8 でした。日本以外の国は対策を講じて 2010 年頃には 2.0 近くまで増やしましたが、日本だけが低下してきました。その結果、日本の将来人口は 2005 年頃を頂点として減少している状態です。

2 番目の問題は財政収支です。日本は世界で 2 番目に赤字が多い国です。その累積である長期債務残高は世界一です。国家財政が破綻していると言われるギリシャより高い状態です。1976 年には 30~40 兆円でしたが、現在では 1000 兆円まで増えました。今年度の予算でも 40 数兆円の国債を発行し借金が増えていきます。

日本は事業税が世界でもっとも高い比率の国です。これが経済の発展を阻害しているという意見があります。

解決策の一つは外国の資金が日本に投資されることですが、これまで投資された資金の累積は世界最下位です。二番目は貿易で稼ぐことですが、貿易も赤字になりました。31 年間、黒字を重ねてきましたが、2011 年から赤字になりました。原因はエネルギー自給率が 4%程度という非常に低いことです。福島第一原子力発電所の事故以来、ほとんどの原子力発電所を止めてしまいましたので、大量の石油や天然ガスを輸入することになり、昨年だけで 4 兆円近く買い、その結果 12 兆円の貿易赤字になりました。

もう一つの手段は観光です。日本の観光収入は世界の 17 番目ですが、GDP あたりの国際観光収入は 0.08%で世界最下位です。東京オリンピックを迎えるにあたり英会話の努力が求められていますが、TOEFL の順位は 56 개국中 55 番目です。関連して困ったことは若者が内向きになっていることです。学生の海外留学比率は 56 개국中 48 番目です。

さらに困ったことは、日本での生活費が高価ということです。ニューヨークを 100 とすると日本で生活する場合は 140 くらいかかり、世界一生活費のかかる国になっています。オフィス賃料も世界一高価です。日本に工場を建設しようとしても、イタリアに次いで電気代が高い国ですから工場も誘致できない。通信料金も高く、携帯電話の料金は世界一です。インドや中国などの 20 倍近い料金です。

それらの結果、日本の国際競争力は急速に低下しています。1992 年までは世界一でしたが、最近では韓国や中国にも抜かれました。これが日本の直面している状態です。日本はいい国だと思っておられるかも知れませんが、国際社会の中ではこういう状態です。

最高の日本

しかし、日本にはいい面もあります。男女の平均寿命は世界一です。重要なのは平均寿命ではなく健康寿命です。健康寿命というのは、平均寿命から他人の手を借りなければ生活できない年数を引いた自立して生活できる年数です。日本は 2 番目に長い国です。

もう一つ日本の素晴らしい特徴は平等な国であるということです。ジニ係数というのは国民の収入の平等性を示す数字ですが、それを基準にすると日本は世界有数の平等な国です。中国は上位5%の金持が家計試算の60%を独占していますが、日本は12%程度ですから、きわめて平等な社会です。

教育水準はPISAという調査によると、数学は世界で6番目、理科は4番目です。その成果は科学論文数が世界で3番目に多いということに反映しています。特許を世界一多く持っている国が日本ですし、実効特許数も世界一多い国です。

視点が結果を決定

良い点、悪い点の両方を紹介しましたが、大事なことは、それをどう見るかということです。前半のデータだけを見ると日本は駄目だと思えますが、後半の良い点だけを見れば素晴らしい国です。アメリカのコンピューター学者アラン・ケイは物事を見る視点によって結果は8割決まっていると言っています。

分かりやすい作り話を紹介します。アメリカで靴を作っている会社が新しいマーケットを探そうと考え、社員を2人アフリカに調査に行かせました。その当時のアフリカは靴を履いて生活している人がほとんどいない状態でした。最初に調査した社員は自分の会社の顧客はゼロと報告しましたが、もう一人の社員は住民すべてが顧客だと報告しました。

過剰適応という問題

それでは日本の現在の状況をどのように理解したらよいかということです。生態学で過剰適合の悲劇という経験法則があります。中南米にヤリハシハチドリというクチバシの長い小鳥がいます。クチバシと体の長さが同じほどあります。トケイソウというラッパのような形をした花があり、蜜は花の奥にあります。蜜を吸うためにはヤリハシハチドリの長いクチバシが有利である一方、トケイソウにとっても、この鳥が受粉をさせてくれるという恩恵があります。しかし、もし火山が爆発してトケイソウが絶滅すると、ヤリハシハチドリは普通の花から蜜を吸う羽目になりますが、長くちばしが邪魔になります。またヤリハシハチドリが伝染病で大量に死んでしまえば、トケイソウには受粉させてくれる動物がいなくなります。環境が変わらないときには持ちつ持たれつの関係が、環境が激変してしまうと共倒れになるということです。こういうことは地球の歴史の中で何度も起こっています。

一例を紹介します。ニュージーランドはオーストラリア大陸の一部でしたが、一億年前に分離し現在の位置まで押し出されてきました。この一億年前という時期には重要な意味があります。オーストラリア大陸に哺乳類が誕生する直前だったのです。その結果、ごく最近まで、ニュージーランドには、哺乳類は二種類のコウモリしか居ませんでした。ニュージーランドには捕食動物がいなかったために、数十種類の飛ばない鳥が繁殖しました。ところが150年前にイギリスからの移民が到来し、同時にネコやキツネも持込まれました。これ

らの動物にとって飛ばない鳥は格好の獲物で、ニュージーランドにしかいない 86 種類の固有の飛ばない鳥のうち 36 種類は絶滅してしまいました。これが過剰適合の悲劇の一例です。

画一を目指した明治政府

現在の日本がこれに当てはまるのではないかというのが私の考えです。日本が現在の大国になった出発点は明治維新です。明治維新以前は 300 ぐらいの藩が独自に地域を治めていましたが、維新により明治政府が統一する中央集権国家になりました。結果として東京一極とか大阪、名古屋を含めた 3 極に集中する社会になりました。農業が基本であった産業が工業に転換しました。各地で話されていた方言を標準語に統一しました。教育も 6000 ぐらいあった寺子屋や藩校で独自に行っていたものを全国同じ教育にすることになりました。

一言で言えば日本中を画一にするということが明治政府の政策に共通する特徴でした。明治 5 年に「学事奨励に関する被仰出書」が出て「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめんことを期す」という目標達成のために採用された方法が画一だったのです。校舎は文部省が見本を設計し、全国に同じような木造校舎が建ちました。教材は国定教科書にし、教育方法も師範学校で教師を教育し統一しました。言葉について全国で統一するために各地の方言を調べ、東京山の手言葉を標準語にして学校で教えました。1925 年にラジオ放送局が東京、名古屋、大阪に誕生します。最大の使命は標準語を全国に浸透させることでした。

それらの影響で、日本は内向きの国になりました。日本は 1.2% ぐらいしか外国人労働者はいませんし、外国の文化を受け入れる傾向が非常に低い国です。さらに男女不平等な国でもあり、女性の重役の比率は 43 番目、国会議員の女性比率は 163 番目で 8% しかいない国です。すなわち男性の視点で画一社会をつくってきたと言えます。

しかし明治政府が画一を目指したことは大成功だったのです。明治時代は農業社会から工業社会への転換を推し進めましたが、工業の重要な特徴は画一だからです。工業社会では同じ製品を大量に生産し、国民が同じ物を大量に購入することが重要です。明治時代の画一政策は間違っていないのです。その結果、鉄鋼生産は 1980 年にアメリカを抜いて世界一になりました。造船も 1975 年には世界で生産した鉄船の半分は日本の造船所で生産されるまでになりました。自動車も本家のアメリカを 1986 年頃に抜いて世界一になり、DRAM という半導体メモリーも 1986 年にアメリカを抜いて日本が世界一になり、世界で使われている半導体メモリーの半分が日本製という時代になりました。

巨大な潮流転換

ここまでは明治以来の政策がすばらしかったのですが、90 年頃に大きな変化が発生しました。まず増える社会から減る社会へ変わり始めました。日本の人口は 2005 年頃に頭打ちになって減少しはじめています。明治時代以来、3 極集中もしくは 1 極集中だった社会が

分散を始めました。三番目には工業社会が情報社会に変わり始めました。国民の意識にも変化が発生し、かつて日本人は世界一勤勉な国民だと言われていましたが、80年代から仕事よりも家庭とか生活を重視する人が多数派になりました。そういう変化を反映し、物の豊かさよりも心の豊かさが大事だという人が多数派になりました。

開発から回復という変化も発生しました。人口が急増した時代には自然環境を開発することは必要でしたが、2003年に自然再生推進法ができ、開発した自然を以前の状態に戻そうという方向に逆転しました。明治以来、政府が国を牽引してきましたが、NPOの制度が1997年に出来て、国が行うべきことを民間で行う方向に転換を始めました。この象徴がアダプトプログラムで、道路の清掃とか河川敷の清掃など国や自治体がおこなうべき仕事を民間が肩代わりする事例が増えてきました。

70年代から90年代にかけて、明治以来目指してきた国の方向が違う方向に動き始めたのです。残念ながら、日本はこの潮流に乗り遅れ、次第に地位を下げてきました。

実行すべき転換政策

これから我々がすべき事ははっきりしています。社会を画一から多様に変えることです。多様を象徴するのは情報です。情報は違ってこそ価値があるものです、例えば、ベストセラーの小説が登場し、その影響を受けて似たような小説を書くと、これは価値が無いどころか、最悪の場合は盗作になります。違う物に価値があるのが情報社会です。この情報社会に日本は出遅れました。コンピューターの普及は世界の21番目、携帯電話の普及は44番目、インターネットのブロードバンド回線の普及は16番目です。さらに料金が高いという問題もあります。携帯電話の使用料はロシアの16倍です。ブロードバンドの料金も世界で30番目です。その結果、IT競争力は世界の16位前後です。

そのためには多様な社会に転換することですが、これをいち早く国家の政策として取り入れたのはアメリカでした。アルビン・トフラーという未来学者は世界の歴史を調べて国の最も大事な力は筋力から財力に移り、21世紀は知力が最も大きな力になると言いました。ブレジンスキーというカーター大統領の安全保障特別補佐官は、アメリカが世界一の国になったのには4つ要因がある。世界一の軍事力、経済力、技術力以外に「粗野ではあるが世界の若者を魅了して止まない文化力を持ったこと」だと言っています。それを象徴しているのがダルビッシュ投手や田中投手です。つまりアメリカの野球は世界中の若者を魅了しているのです。世界の映画俳優もハリウッドを目指します。このような見解をまとめたのがジョセフ・ナイというハーバード大学教授で、『ソフトパワー』という本を書き、国の力は武力、財力の時代から魅力の時代に移行するとしています。魅力というのは英語ではアトラクティブネス、引きつける力です。人、物、金、情報を自分の国に有利なように引きつけることこそ21世紀の国力だというわけです。

自国の魅力に気付かない日本

そこで GNP から GNC という言葉が登場しました。GNC は、グロスナショナルプロダクトで、国民が一年間に作り出す富の総計です。GNC はグロスナショナルクールですが、クールは格好いいという意味です。つまり経済より文化が重要だという意味です。昨今、日本は経済では一流ではないが、ポピュラー音楽、建築、和食など世界を魅了する文化では一流であるから、それを国力にせよということです。

しかし、日本人は自国の文化の魅力に気付かなかったのです。1910年にユリウス・クルトというドイツ人が「SHARAKU」という本を書きました。東州斎写楽のことです。この本の中で写楽はルーベンス、ベラスケスと並ぶ世界三大肖像画家の一人だと書いています。当時の日本人は写楽には関心が無かったのですが、この本を読んだ日本人が写楽を買おうとしたときは時すでに遅しで、外国人が買ってしまった後でした。写楽には 145 種類の版画があるのですが日本にあるのは 101 種類です。版画は 706 枚ありますが、日本には 198 枚しかありません。

建築についても同様です。桂離宮は現在では日本を代表する建築とされていますが、大正時代は人気がなく寂れていました。ドイツのブルーノ・タウトという建築家が見学して感動し、これこそ日本を代表する建築だと『日本美の再発見』という本に書きました。これを読んでから、日本人は桂離宮の素晴らしさを認めたのですが、明治時代には反対の動きがありました。明治元年に神仏分離令が出て廃仏毀釈運動が日本中を席卷します。神道こそ日本の国家宗教だということになって仏教寺院が迫害されました。奈良の興福寺も維持できなくなり、五重塔と三重塔を売りに出しました。ある商人に売ろうとしたところ、現在の価格で 150 万円という査定でした。理由は呼ばれた商人が薪屋だったからです。幸い売られずに、現在では国宝となっています。

最近でも同じ事が起こっています。和食です。和食の素晴らしさを認めたのはアメリカです。1977年にアメリカで食事に関する報告書が出されました。その結論は「世界の理想の食事は元禄時代以前の日本の庶民の食事である」ということです。元禄時代以前、一般庶民は粟や稗などの雑穀、海藻の入ったみそ汁、旬の野菜、目の前の海で獲れる白身の魚を食べていたのですが、それが理想の食事だということです。そこでアメリカ人は寿司や刺身を食べるようになり、アメリカには約 17000 店の日本料理屋ができました。ヨーロッパに 5500 店、ロシアに 500 店くらいあるという状態です。ところが、そのころから日本人が食べ始めたのがステーキやハンバーグなのです。2010年には日本人が食べる肉の量と魚の量が逆転しました。世界が和食を理想的な食事と評価してくれたのに、気付かないのが日本人なのです。

GNC から GRC への転換

それでは GNC の源泉はどこにあるのかと考えると、国家にはなく、地域にあるのです。そこで私は GNC ではなく GRC に変えて考えるべきだと言っています。GRC はグロスリ

一ジョナルクールです。クールというのは「格好いい」という意味です。それらは集合体として国にあるけれども、それぞれは地域にあるということです。例えば愛知県には、美しい景観、祭事、史跡、温泉、食事などいくらでもあります。財力から魅力への100年単位の転換をするときに、その資産は地域にあるということです。

その背景は日本が多様な国であるということです。まず自然が世界有数の多様な国です。2009年から10年に、世界中の学者が海の中にどれだけ多様な生物がいるかということ进行调查しました。結果は日本周辺に最も多くの海洋生物が棲息していることがわかりました。陸上においても日本には188種類の哺乳類がいます。その20%以上は日本にしかない固有種です。同じ島国のイギリスには50種類の哺乳類しか棲息していないうえ、固有種はゼロです。

その背景は日本が森林を守ってきた世界でも希有な国ということです。日本の国土の68%は森林ですが、それが多様な自然と多様な文化の源泉です。日本の国土は尾根で地域が分断されていたので、言葉も細かく数えると300くらいの方言が残っています。

自然崇拝が日本文化の原点

西洋科学は征服する対象として自然を見ているのですが、日本は違います。立派な樹木はご神木と言って神が宿るから伐ってはいけない。大きな岩は磐座と言って神が降り立つ場所だから残してきました。動物は神の使いとして崇拝してきました。アイヌ民族もあらゆる動物は神の使いであると理解しています。

この自然観を象徴するのが神道です。日本最古の神社の一つで奈良にある大神神社のご神体は神社の背後にある三輪山です。和歌山県にある飛瀧神社の御神体は那智の滝です。和歌山県にある神倉神社の御神体は古事記にもでてくる巨石です。自然は人間の役に立てばいいという考えではない精神文化を培ってきたのが日本です。この素晴らしさが東日本大震災のときに証明されました。多数の神社が津波の到達した限界に位置していたのです。一例として、仙台空港の海岸寄りに806年の延喜式神名帳に名前が書かれている由緒ある下増田神社がありますが、津波が通過した後にも下増田神社はそのまま残っていました。相馬市にある八龍神社も同様に残りました。これを不思議に思って調べられた研究者がおられます。相馬市一帯の82の神社を調べたところ、68の神社は津波の到達限界線上に存在し無事だったのです。このような精神文化の意味を認識する必要があります。

縮小こそ21世紀の目標

これからの時代を考えると、小さくするというを新しい価値観として考えなければいけないと思います。これまでは成長とか増大を目標とすることが常識でした。安倍内閣のアベノミクスも物価の上昇による成長を考えているのですが、日本は小さくして豊かさを実現する文化を創り出した世界で唯一の国だということを韓国の学者が言っています。最近、韓国は日本に文句を言っていますが、ほんの30年前には、韓国人も日本をすば

らしいと言っていたのです。

私は日本人が最も小さく縮めたのは茶道だと思います。お茶を飲む風習は遣唐使によって日本に伝わった文化ですが、独自の精神文化にしたのは日本です。裏千家の千玄室大宗匠に抹茶をいただいたときに「茶道の本質とは何ですか」と伺ったことがあります。「一杯の抹茶を飲むときに宇宙に思いを致すのが茶道の本質です」という答えでした。わからないので「どうしてですか」と尋ねたら「火水木金土という宇宙を構成する五つの要素が全て含まれているでしょう」と言われました。火は炭火、水はお茶の水、木はお茶が木ですし、炭が木です、金は茶釜が金属で出来ている、土は茶碗が土で出来ている。一杯のお茶の中には宇宙の五大要素が全て凝縮されており、それを理解するのが茶道の本質というわけです。宇宙を茶碗一個に縮めたのが日本の文化です。

西欧文化と比較すると明確です。客をもてなすとき、西洋では立派な建物に迎えますが、日本では茶室でおもてなしをします。その庭は、ベルサイユ宮殿では 800 ヘクタールの広大な庭園によってルイ十四世が支配する宇宙を表現しましたが、日本では宇宙を表現するには坪庭で十分です。西欧の客室は広いのが常識ですが、日本は一畳台目といって畳一畳分でもおもてなしできます。飾る花も日本では一輪挿しです。食事も西洋料理は次から次へと食器をかえて料理が出てきますが、日本では一膳の箸と重箱に詰めた料理で立派なおもてなしが出来るのです。お土産も日本では風呂敷に包んで渡しますが、これは何度でも使えます。西洋では美しい包装に包んだお土産を渡しますが、包装はゴミにしかありません。

2004 年に『縮小文明の展望』という書物を書き、縮小という思想が日本の文化の本質で、環境時代には重要だということを書きましたが、あまり売れませんでした。ところが昨年フランス人のセルジュ・ラトゥーシュというパリ大学名誉教授が世界の縮小が必要だという書物を書かれました。西洋文明もこういうことに気がつく人が出てきたというのが現代の状況です。

それでは縮小のためには何が大切かということですが、論語に、為政者に向けた言葉で「人は貧しきを憂えず、等しからざるを憂う」という言葉があります。全員が同じように貧乏であれば誰も我慢しますが、富の配分に不平等があれば国民は不満を持つから、為政者は気をつけなければいけないと言っています。この論語を生み出した中国は、現在、世界一格差の広がっている国です。老子も同じように「吾唯足知」、足るという意識が重要だと言っています。この精神がなければ日本の社会を変えてゆくことは出来ないと思います。

小野道風という偉人を生み出した春日井の皆さんに頑張っていたいただきたいと思います。

(記録編集：河地 清)

※記録編集に際して、予め月尾嘉男氏に「記録原稿」の校正をしていただきました。

それを基に本会『会報』形式に編集致しました。

〈お知らせ案内〉 (下記『会報』残部若干有ります。FORUMのときに重し下さい。)

『会報』バックナンバー一覧 -その1- (平成25年3月～平成26年2月)

日程	討論テーマ	発表者	会場
3/3 (日)	総会「ふるさと春日井学」と「まちづくり」について	河地 清 氏	グリーンパレス
	「書のまち春日井」と小野道風について	塚田忠雄 氏	『会報NO1』
4/7 (日)	「下街道」の歴史	村中治彦 氏	総合福祉センター
	「歴史ある街道」と鳥居松商店街の活性化	市原和久 氏	『会報NO2』
5/5 (日)	内津川流域の歴史	長縄道明 氏	総合福祉センター
	内津川流域の自然	波多野 茂氏	『会報NO3』
6/2 (日)	産業遺構の保存運動ー中央線トンネルの保存ー	村上真善 氏	レディアンかすがい
	中央線敷設と春日井の近代化	安田裕次 氏	『会報NO4』
7/7 (日)	ふるさとの再生とまちづくり	大塚俊幸 氏	ささえ愛センタ
	勝川商店街の再生	水野 隆氏氏	『会報NO5』
8/4 (日)	地域活性化の方法と実践ーテーマ説明ー	河地 清 氏	ささえ愛センタ
	地域活性化の取組ー近江八幡市ふるさと学習の事例ー	安部耕作 氏	『会報NO6』
8/28 (日)	「小野道風の源流を訪ねる」巡検バスツアー	「ふるさと春日井学」研究フォーラム主催	滋賀県大津市他 『会報NO7』
9/1 (日)	庄内川水系の自然	原 彰 氏	ささえ愛センタ
	庄内川流域史ー庄内川水運の歴史を中心にー	桜井芳昭 氏	『会報NO8』
10/13 (日)	小野道風の記憶と伝承	松河戸誌研究会	ささえ愛センタ
	小野道風出生の真実	塚田 忠雄 氏	『会報NO9』
11/3 (日)	福澤諭吉と林 金兵衛	河地 清 氏	ささえ愛センタ
	ふるさと春日井の危機を救った人々	近藤 雅英 氏	『会報NO10』
12/1 (日)	ふるさと春日井高蔵寺地区の今昔	金子 力 氏	高蔵寺ふれあい
	高蔵寺商店街の再生を考える	青山 博徳 氏	『会報NO11』
1/5 (日)	ふるさと春日井のまちづくりと商業の活性化政策	塚田 忠雄 氏	ささえ愛センタ
			『会報NO12』
2/2 (日)	書道文化の振興と地域の活性化ー小野道風顕彰活動の歴史	安達 柏亭 氏	ささえ愛センタ
	「まちづくり」の新しい発想	河地 清 氏	『会報NO13』

※2013年度会報(平成25年3月～26年2月)「ふるさと春日井学」研究フォーラム発行(一冊1,000円)

〈事務局〉「ふるさと春日井学」研究フォーラム 会長 河地 清

TEL/FAX 0568-82-5973 メール: kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報サイト: <http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学 検索 